

●竹島渡航日記 (一) 旅行者 某生

▲廿二日 十二時汽船に乗り松江を發す船中には東島司吉田税務局長其他數氏の知名者があつた本日は余りに天氣晴朗であつた爲め却つて幾日の天候を氣遣はるゝ程であつたが何れも甲板に出で、本庄森山を指しては又大山を顧み、見馴れた山も物珍らしいものゝ様に話の材料とはあつて甲板の上は一入の景色を増したのである船は進む眺め來つた山口の中でも森山附近の第三紀の凝灰質の山は他のものとは異つて黄赭色の禿頭を表はし層々蕪村豊彦を畫に見る所の山の様に温しき姿に又奇抜なる形が加はつて特別なる一幅の山水が見られたのである、

▲境についてから一行は分れて油屋引野の隅方に泊つた面白くも面白い何時も替らぬ所の境の港の内でも一寸替つて居ると思はれたのは近來大分大阪風の店が多くあつたことであるされども由來狭かい所であるから何を買はふにも仕様が面白いので同行者の中にねつくたいの必要があるとして買ひに行きた人があつたが町内で僅か二軒しか持たぬといふ居た、

▲境の港計りでなく夜見濱全体は其風土から人情を感ずるべし伯耆の襟で半ば又出雲風が加はつた所があるのは誰も知つて居る所であるが此様な人事上の事は他の余り關係もあささうな所の地質上から見ると一致することがある境の港を乗せる所の夜見少濱の砂の底即ち地盤の基礎を見るときには石英班岩と云ふ特別なる隠れた岩が出雲の安來の東方から續きて出て居る日野川其他から流れ來つた所の砂は波の爲めに打ち寄せられて此岩の上に集まり相連つて一帯の長い砂濱をなつたものであるのて只伯耆の砂計りて此半島の形成されたと云ふ簡單なる譯では無い簡様なる有様であるからつまり伯耆の境は伯耆西郡の障壁であると同時に又出雲の開門とあることも免れられぬといふのである、

▲廿三日 午四時起床急いで第二隠岐丸に乗したり境を越する頃は未だ夜も明けぬに開みの中に漸く提灯の光で船室に導かれたのであるが彼是する内に舟は美保關の沖合にかゝらんとし東天又薄く光明を放たんと

として誠に心地よき薄明の現象をば暫くの間呈して居たやかて水平線から昇り出づる所の太陽は珍らしいとて多數の人は甲板の上に出て之を拜せんとするものもあつた吾輩も亦水彩繪具などを取り出して赭色の彩雲の間に半ば頭を出した所の不思議な大形なる朱色の陽暉と黒色漆の如き海水をば其下に染めかざして居た、

▲天氣は此上をく風も亦少かい方であつたされども稍波は高かつたものであるから船客の中には大分船暈をした人もあつたが兎も角六時間立たぬ内に無事西郷港につきた船分歡迎の人も多かつたが万事東島司と中島縣屬の盡力で誠に都合よく各三派に分れて宿屋につくことゝあつた、

▲此日大山は極めて鮮明に見えて一點の雲も無いのである簡様大山が余りに鮮明に見えるのはつまり低氣壓の襲來を示して居るのであるが聞説漁師などは此大山の雲の有無を見て天候の如何を豫知することである我輩も會て天候を氣違ふた如くに夕刻よりは何となく變を摸樣とやらんとしたのである困つたものだ空を眺めて愁嘆する人もあるしまーゆつくりし賜へと落ち付いて居る人もなつたこんを時分に船を出したらそら大變だと隠岐句調の水夫などは云つて居たが忽ち測候所から天候不穩の兆ありと云ふ電報が達した見る／＼雲行きは早くあつた五時過には薄墨の様に空が替つたのである、